

古墳から仏教へ

(未確認ではあるが) それまでの古墳時代前期は、祝人(はふり)とって古墳を守った神官が祭祀をいって人心を治めていた。その地が太田市菅塩地区に祝人郷(はふりごう)として残っています。

周辺は成塚という地名があるように古墳や古墳群が数多く点在しています。太田市に北金井地区というところがあります。その駒形神社は埴輪の釜跡でこの時代の古墳で使用している埴輪の多くは、ここで造られたようです。現在でも発掘は、極その一部しかされておらず、今後の調査を待っています。

600年頃に始まる聖徳太子の日本古代仏教が中央政権の統治の一環として、首領の埋葬を主体とした古墳埋葬から寺に変化していきます。その転換点は645年に発布された薄葬令によるものです。

寺井はすでに古墳時代より交通の要所として存在があり、また650年頃から始まってきた東山道の築道計画、宗教改革、朝廷支配それとともに始まった律令制度の元で、協力者の刷新、征東・征夷目的と混じった形を含んだ新交通道路計画の中でも選ばれた形となってきます。

680年頃には寺井の地に寺が作られます。高台に法隆寺のような三重塔のある畏敬を放つ建造物の寺を作ったことは想像できます。それが定額寺という寺井廃寺です。他田部(おさたべ)という地方豪族が作ったとも言われております。

800年頃まで続いたと考えられます。120年くらいあったと考えられます。

寺としての形がどうあったかは、わかりませんが、祭祀型宗教と日本古代仏教の歴史的攻防を勉強していた遣唐使であり、真言密教の発案者伝道師または学者でもある、その時代のスーパースター空海(774年から835年)が訪ねてきたということがあっても年代的にはおかしくはないと思われます。

その勉強の成果として釈迦の下に12神と従えた日本仏教が出来上がっていったと推測されるのではないか。ここには真言宗通りといわれ南北にお寺の並びがあります。